
その時まで。

桜華蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その時まで。

【著者名】

Z9558B

【作者名】

桜華蒼

【あらすじ】

ある日突然灰原の声がでなくなり、新一は見舞うが……

(前書き)

哀ちゃんと新一くん。場合によつては連載に発展するかも。『たとえば～』の感想が嬉しくて久しぶりに投稿しました。御礼のつもりですが、love度は低し。想いつて一方通行？

べじうべと。やじと流すよつて寧に紡がれるその言葉が、
声が、俺を何度も救つてくれていたのだと。

気付くのはいつも無くしたあとだ。

博士が泣きながら灰原の声が出なくなつたのだと、病院で語つた。
原因はわからないまま、翌朝田が覚めたといふことになつてたら
しい。

「入るぞ」

当の灰原は落ち着き払つた様子で、見舞いに訪れた俺を一警して
絵本をパラパラめくる。

看護士さんの差し入れかテーブルにはいくつもの童話の本が無造
作に置かれていた。

「平氣か？」

灰原はターンテーブルに置かれたスケッチブックに手を伸ばし、
開いて（名探偵つてヒマなのね）と書く。

「お前が心配で来たんだよ」

彼女は、俺にペンを渡しスケッチブックの自分の字の下辺りをト
ントンと指で叩く。

「書けつての？」

「くじと領くものだから、俺はベットの端に掛けた言葉を
綴る。

（別にたいしたことないでしょ。みてのとおりよ。たくさん事件が
待つてゐるんだから早くいけば？）

（なにかあつたんだろ？）（じつにわよ）

（昔からそーだよな）

（なにが？）

（都合悪くなると俺のこと遠ざけよつとする）

スケッチブックから顔を上げると、曇つた瞳と視線がぶつかる。

(ま、いーけど。)

俺は書いて紙をめくる。(それよか、天氣もいいし、出掛けよー
ぜ)

(どにに?)

(米花科学館)

(昨日からプラネタリウムの内容が新しくなったってさ。ホームページ
に載つてた)

(服もないのに?)

(黒羽からワンドピース預かつてるぜ)

(それ観たらティアナでパスタ食べねえ?)

(帰りにオメーの好きなノクターんに寄つて紅茶飲んでさ)
(夜はミートローフを作るか)

「あらあら? テートの約束?」

いつの間にか背後にいた医師が笑みを称えて悪戯っぽく聞いた。
「そーです。俺ら付き合つてるから」

真顔で言つた俺に彼女はそっかあ、と齒くといきなり屈み込んで
額にデコピンをかました。

突然の痛みにつづくみると真摯な声が降つてくる。

「失格」

「なにが、ですか?」

「恋人失格。 - - だめじやない。小学生が過労で倒れるなんて普通
考えれないわ。親御さんには心配かけたくないくて無理に取り繕うこ
とだつてあるでしょ?」

気付かないの、とは言われなかつたけれど。ずきん、と響いた胸
の痛みに灰原を見遣る。

「症状は声だけだからね。帰りたかつたらいつでも帰つてもいいわ
よ」

引き戸に手を掛けた彼女は一度振り返り少し笑う。

「私もあんまり好きじやないわ」

ドアが閉まつた後で俺は彼女が見ていた視線を追つた。重なつた

本とは別に脇に一冊の本。『人魚姫』

助けてもらつた相手を勘違いし、別のお姫様と結婚した王子。声が出せない人魚姫は事実を打ち明けることなく海の泡となつた。(想いを伝えるのは言葉だけじゃないでしょ)

俺の視線を辿つた灰原はサラサラ綴つた。

(俺は待つて言ったよな?)

同じように解毒剤を飲んだのに、灰原には効かなかつた。「やめたんじゃないのか、研究」

(やめれない)

「なんでだよ」

(早く、あなたと並んで歩きたいから)

何を言えば、どうすれば灰原に届くんだろう。

正直悲しくなつた。こんなに近くにいるのに、心の距離の遠さが哀しい。

「作つた解毒剤を飲んだんだろ?」

(でも、ダメだつた)

しょぼんと俯く灰原の左手を握りしめる。

(俺のこの手は灰原と繋ぐ為にあるから)

手元に引き寄せたスケッチブックに書いて閉じる。

「俺、灰原に名前呼ばれるの好きだよ。コナンの時からずっと、その声が俺を救つてくれてた。だから、今は俺が何度でもお前の名前を呼ぶから。灰原」

偽りの名前だと彼女は言つけれど、彼女を大切に思う人と、変わらうと自身がつけた誓いのような共作。

今度は俺が力なりたい。どんなに時間が経つても変わらないものがあると彼女が気付くまで - - 。

End

(後書き)

もう久々すぎて文がよれよれ。ずっと哀ちゃんは好きなんですが、
愛が追い付かない（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9558b/>

その時まで。

2010年10月15日22時15分発行